

編集後記

5 円玉の穴の片側をセロハンテープで塞ぎ、穴に水を目一杯溜めて 5 円玉レンズを作った。水を溜めるのにたっぷり水を含んだ綿棒を使った。最初に濡れた綿棒で穴を突くと薄らと水の膜が張る。次いで何度も軽く突くと綿棒の水が引っ張られて穴の水が増えていく▼カレー鍋から御玉を使って皿によそうとき、途中で御玉からカレーの汁がぼたぼた垂れないように、御玉を一端持ち上げた後、鍋のカレーの表面にちょこんとつける。余計にカレーが御玉につくと思いきや、御玉にしがみついていたカレーの液滴たちはみな鍋に戻される。綿棒の水が 5 円玉の穴に張った水の膜に次々移動するさまを見て、カレーが御玉からぼたぼた垂れないこの伊東家の食卓的な技を思い出した▼これらは表面張力のなせる技である。このお陰で、穴を満たす水はこんもりと凸状に盛り上がる。5 円玉の表裏両側に盛り上がってもよいが、紙に水滴が付かないレンズにしたいので、穴の下側はセロハンテープで塞いだ▼こうして 5 円玉レンズができる。倍率は 2, 3 倍になった。このことは屈折の法則から簡単に検証できる。入射角と屈折角の計算を楽にするため、盛り上がった水面を回転放物面として倍率を出したら少し大きくなった。ともあれ、穴の枠付近のゆがみを除けば、想像していたよりもまともなレンズができた。魚眼レンズの方がよっぽど像が変形する▼魚眼レンズの魚眼とは、その名の通り、魚が水中から空を見ると、広い視野を見ているはずだということからつけられたのだろう。実際、Wikipedia によれば、Fisheye lens は 1906 年に米物理学者で発明家のロバート・W・ウッドが、魚が水中から超広角の半球を見ることにともづいて作った造語とある。魚眼はその邦訳なのか、日本語の造語なのか気になった▼朝日、読売、毎日の新聞データベースで‘魚眼’を検索した。朝日 1923 年 4 月 18 日、白鳥省吾の論説‘散文詩の意義(下)’が最古の記事だった。しかし文中の‘……室生犀星氏の「魚眠洞漫筆」……’の魚眠の印字がかすれて魚

眼として検索されただけだった。だが漫筆が気になってググったら、ウィキペディアに、魚眠洞は室生犀星の号で、1925 年 6 月、初の随筆集‘魚眠洞随筆’刊行とある。漫筆は随筆のかすれ印字かとも思ったが、どうしても漫は随に見えない。もう 1 点、刊行は 25 年なのに、23 年の新聞記事にタイトルが記載されていることが気になった。同ウィキペディアによれば、20 年頃に犀星は魚眠洞と号したとある。となると随筆集が刊行される前の魚眠洞の随筆を白鳥が読んだ可能性が高い。が、この探索の興味が失せた▼そこで魚は魚眼レンズの名前通りの視野を持つか屈折角を計算した。水中 10cm の浅瀬にいる魚の最大視野角を 96 度とすると、水面でかなり屈折して、ほぼ 180 度水面ぎりぎりまで全方向見えることがわかった。死角と思って魚に近づいてもばれているわけである。高校のとき後ろの席で教科書を立てて隠れて早弁したことがあった。一番前の教卓にくっついた死角の座席でも挑戦した。後ろはともかく、死角の席でも教師にすぐにばれた。あれは魚眼眼鏡をかけていたのか。いや、匂いでばれたのだろう。(編集部)